

# 農民兵士の生と死 北上戦の一人の手紙

関沢まゆみ

Records and Memories of the Life and Death of the Farmer-soldiers: Examples from Two Soldiers in Kitakami City

## ①なぜ今か

## ②小原清止さんの生と死

## ③菅沼義平さんの生と死

## ④生の知らせと死の知らせ

## ⑤論 点

## ⑥資料紹介

### 【論文題面】

兵士の手紙については、書き手の兵士本人の声を聞くことが重視され、一方の受取り手の声についてはあまり注目されてこなかった傾向がある。本稿では民俗学の立場から、戦死、戦病死という異なる兵士の大量の死をそれぞれの家族がどのように受けとめ受け入れていたのかについて考えていく一つの試みとして、岩手県北上市の二人の農民兵士の手紙を手がかりに、記録（手紙）、記憶と語り（聞き取り情報）、物（位牌や墓石などの死者の表象物）という三つの資料的側面から整理を行った。そして以下の四点を指摘することができた。第一に、二人の農民兵士の家族への手紙の特徴は、戦闘状況にはあまりふれずに家のことばかり心配して書いており、身体は戦地にても心は常に故郷の家族の元にあったと考えられる。兵士にとっては手紙を出すことが、家族にとっては手紙がくることが、生存の知らせに他ならなかった。第二に、戦死、戦病死は伝統的な日本の農村社会においてはかつて経験したことのない死に方であった。公報による死の知らせ、村葬、家の葬儀などが慌ただしく流れても家族

は死をすぐには受け入れられず、妻は夫の死を自分で何とか確かめようとする衝動に突き動かされていた。第三に、戦死、戦病死した夫の墓を作ることが夫の死の受容の方法の一つであり、老境においても墓とは生者と死者との関係性の「切断と接合の装置」に他ならぬと解説できた。第四に、戦死、戦病死者の位置づけの具体相において死者の表象物および「供養・慰靈・追悼」という宗教儀礼の重層性、重複性が注目された。死者に対する民俗儀礼としては、普通死の場合には伝統的に「供養」であり、異常死の場合には「慰靈」である。そして宗教色を排しながらその人物の死を悼む場合には「追悼」である。これら三種類は当然その意味も異なり、「供養」の場合には成仏を、「慰靈」の場合には神格化へ、と人格の喪失と異化が現象化するのに對して、「追悼」の場合には人格が維持され、悼まれつづける死として定位する、というそれの死者の位置づけの方向力が作用する。戦死、戦病死の表象物および儀礼は、空問的重層性とともに宗教儀礼的重層性をも有している点にその特徴がある。